

## 把握対象と顕現対象について

福 田 洋 一

一般にチベット論理学においては、知の対象は、把握対象 (gzung yul)、顕現対象 (snang yul)、思念対象 (zhen yul)、活動対象 ('jug yul) の 4 種類に分類される。しかし、それらの規定は、それぞれの論者間で大きく異なり、争点の一つとなっている。最初期の論争は、チャパ (Phya pa Chos kyi seng ge, 1109-1169) の主張に対するサパン (Sa skya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, 1182-1251) の批判にまで遡る<sup>1)</sup>。チャパは、直前の瞬間の対象が次の瞬間の知の原因である、という経量部説を批判し、実在しているにせよ、実在していないにせよ、あるいは普遍であっても、現に知に直接的に現われているもののみが「対象」たりうると考えて、「顕現対象のみが把握対象である」と主張した<sup>2)</sup>。それに対しサパンは、効果的作用の能力 (don byed nus pa) のある個別的存在者 (rang mtshan, 自相)こそが、人がそれを対象と見なして活動するものであり、真に「対象」と言うに値する、そしてその同じ個別的存在者としての対象が、直接的に知られるときには把握対象であり、隠匿態 (lkog gyur) として知られるときには執着対象であり、その両方とも人がそれに対し活動を起すならば欺かれないので活動対象である、と主張した<sup>3)</sup>。以上の対比から明らかなように、両者の主張の相違は「対象」概念の理解の相違である。しかし、サパンはそのことを問題にしないでチャパを批判をしているため、議論は噛み合わないままであった。本稿ではこの二人の主張が、その後どのように受け継がれ、あるいは誤まり解され変質していったかを、特に把握対象と顕現対象の関係について、サキャ派とゲールク派の代表的論理学書のいくつかの中に後づけてみよう。

1 サパンの著『リクテル』*Tshad ma rigs pa'i gter* に対するコラムパ (Go rams pa bSod nams seng ge, 1429-89, 以下 G と略す)、およびシャーキャチョデン (Śākya mchog ldan, 1428-1507, 以下 S と略す) の注釈書では、上述のチャパ説は「把握対象と顕現対象は同義 (don gcig) である」という形で言及される<sup>4)</sup>。しかし、この言い回しはチャパ自身の表現とは異なっていることに注意しなければならない。チャパは、把握対象の本質が顕現対象であると主張することを意図して、「顕現対象こそが把握対象である」あるいは「把握対象は顕現対象に他な

らない」と言っているのである。その際、上述の「対象」概念の理解を前提していることは言うまでもない。それを単に両者が「同義である」と言い換えるとき、チャバ説の意図は覆い隠されてしまうことになる。そのため、何故チャバが「顕現対象こそが把握対象である」と考えたかは不問に付されて、チャバ説の表面的な結論だけが取り沙汰されることになる。

それは特に、GやSによるチャバ批判に現れている。サバンのチャバ説批判が説得力を持たないことは既に指摘したが、GやSにはその傾向がより明確に見られる。例えばGは把握対象を「それを把握している直接知覚に、自己と相似した形象を直接的に投影する外界の存在」<sup>5)</sup>と定義している。これは確かにダルマキールティの言葉に典拠を持つ、経量部に特有の「対象」設定方式である。彼らはこのような経量部思想の立場に立った理解を前提した上で、チャバ説の不都合を指摘する。しかし、そもそも経量部説を「原典に説かれたもの〔として〕設定せずに自らの論理によって」<sup>6)</sup>否定したチャバにとっては、それは不当な非難であったと言える。

2 一方、チャバ説を「把握対象と顕現対象が同義である」という主張として捉え、自説をそれと対比的に、把握対象と顕現対象を異なったものとして主張するとき、GやSは、サバンの説をも変質させることになる。サバンの議論の展開においては、対象たりうるのは効果的作用能力を有する実在のみであり、それが知との関係において「把握」されたり、「思念」されたり、「活動」の向かう所となったりするとされる。この文脈においては把握対象は、決して知に一瞬先行する外界の存在を意味していない。しかるにGやSの解釈においては、把握対象、顕現対象、思念対象、活動対象の4つは並列され、それの他に「対象」なるものは設定されていない。サバンの考えていたような有機的な構造は忘れ去れてしまっている。それだけではない。サバンはGやSとは異なり、把握対象と顕現対象が「同義である」ことを批判していない。なぜならば『リクテル』においてそれらの関係について表立って言及することがなく、また「〔分別知に〕把握対象は存在しないと論証された」という偈の中の「把握対象」という語を自注で「顕現対象」と置き換えているからである<sup>7)</sup>。以上の様にGやSの議論は、チャバとサバンの理論が元々持っていた対立とは別の論脈へと変質してしまったと言える。

3 一方、「顕現対象と把握対象が同義である」という主張は、ゲールク派の文献の中に見出すことができる。同派の創始者ツォンカバ(Tsong kha pa, 1357-

1419) の短い論理学入門書に始まり後代の綱要書に至るまで、その主張は踏襲されていく<sup>8)</sup>。多くの場合、4種の対象の名称を列挙した上で、把握対象と顕現対象が同義であると断わり、顕現対象の定義のみを述べる。はたしてそれらはチャパ説を継承する意図があったのであろうか。Sは《このようにしてチャパ論師は、経量部説を否定して三つの把握対象を規定なされた。また、チャパに従う者たちが、経量部説を承認したのち〔にも、〕自説を、顕現対象と把握対象の規定のチャパ説の通りに設定するのは、錯誤の上にも錯誤を二重に積み重ねたのである。》<sup>9)</sup>と言う。以下の理由によって、ゲールク派はここに言及される「チャパに従う者たち」に含まれると考えられる。第一に、ここでの「チャパに従う者たち」は経量部説に立ちながら顕現対象と把握対象を同義と考えている者ということになるが、実際ゲールク派は、後述の様に経量部の立場に立った上でそれらを同義とする設定を行なっている。第二に、直接知覚の対象たる個別的存在者と分別知の対象たる対象の普遍 *don spyi* と錯誤した無分別知の対象たる非存在〔でありながら〕顕現〔するもの〕*med pa gsal snang*<sup>10)</sup>の三つを顕現対象とする、というチャパ説の特徴的見解がツォンカパの入門書にも採用されている<sup>11)</sup>。第三に、他の箇所でもチャパ説を踏襲したと考えられるゲールク派の見解が度々Sによって批判の俎上に載せられている。以上から、少なくともゲールク派は、顕現対象と把握対象を同義とみなす説をチャパ説と考え、それを自説としていたこと、およびSもゲールク派がチャパ説を継承していると考えていたことが推定される。

しかし、Sが指摘するように、経量部説を否定することによって成り立っていたチャパ説を、経量部説を承認してもなお主張するとすれば、それは、表面上はともかく、実質的にはチャパの本意から遠く離れてしまっていると言わなければならない。その典型的な例を示そう。ツォンカパの弟子ゲンドゥンドゥブ (*dGe 'dun grub*, 1391-1474) の『リクゲン』*Rigs pa'i gyan* では、顕現対象は次のように規定されている：《「ある物にとっての顕現対象」の定義は、その物によって、顕現することのみを通して知られるもの、である。顕現対象と把握対象は同義である》<sup>12)</sup>。この定義は、ツォンカパの規定やGが或る者の説として言及する定義とほぼ同じである<sup>13)</sup>。これは、確かにチャパの考えていた顕現対象の意味とは異なってはいるが、なお「顕現している対象」の意味として十分妥当するであろう。ところがもう一方で彼は、4種の対象に付け加えて「把握の实的対象 (*gzung don*)」なるものを設定し、《「ある物にとっての把握の实的対象」の定義は、その物に自らと相似した形象を直接的に投影するもの、である。》<sup>14)</sup>と規定する。これはとり

もなおさず、経量部説に立った G や S の主張する把握対象そのものである。このような形で知の中の形象の原因としての外界の存在を「把握の实的対象」として体系内に持ち込んでしまうならば、そもそも顕現対象と把握対象を同義である、と主張することに何の意味があるのであろうか。彼の言う把握対象及びそれと同義の顕現対象が、サキヤ派の顕現対象に当たり、「把握の实的対象」がサキヤ派の把握対象に対応していると考えても、彼の説は理論的には全く変質しない。サキヤ派とのこのような類似はある意味では当然のことと言える。なぜならば、ゲールク派の論理学書もサキヤ派と同じように経量部および唯識思想に立ってダルマールティの思想を祖述することを目的としているからである。このように見てくれば、ゲールク派がチャパ説を継承するとして「顕現対象と把握対象が同義である」と主張し続けたのは、チャパ説を批判したサキヤ派に対する対抗意識だけからだったとさえ考えられよう。

4 しかし、S の非難にも拘らず、経量部・唯識思想に立ちながらサキヤ派とは一線を画し、優れた意味でチャパのアイディアを継承したと考えられる、幸運な例がある。ゲンドゥンドゥブにやや先行するケドゥップジュ (mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po, 1338-1438) である。ここでは紙数の関係上詳しく扱うことはできない。筆者はその問題については三篇の論文を著しているので、ここでは概略を述べるに止めたい<sup>15)</sup>。彼は無分別知の顕現対象＝把握対象を $\ll$ ある無分別知にそのものの形象が明瞭に直接的に登ったことを通して、その知の対象となっているもの $\gg$ <sup>16)</sup>と規定する。チャパが顕現対象こそが把握対象であると考えたのは、それこそが形象を介在することなく直接的に知に現われ、知によって現に捉えられているものであると考えたからである。従ってそれは「直接的対象 (dngos yul)」とも言われた。しかしここでケドゥップジュの主張しているのは、それとは異なり、形象を媒介として捉えられる対象である。にも拘らず、それはケドゥップジュの体系内においては直接的対象と考えられている。知自身に立ち登っている形象を通して、それとは別の存在である直接的対象を知る、と考えられている。この場合の対象には、他者認識の対象たる外界存在者と、自己認識の対象たる知自身とがある<sup>17)</sup>。これは無分別知における直接的認識であるが、事情は分別知においても同様である。その把握対象＝顕現対象は、知にその形象の登ったことを通して知られる普遍的存在者、即ち「語の対象」である。この規定方式自体は、何ら経量部思想を前提としていないことに注意しよう。確かに彼もゲンドゥンドゥブと同様、「把握の实的対象」を知の形象の原因として言及してはいるが

18), それは、上の理論においては、経量部の立場での対象が顕現対象となったときの対象だけに対応するものとして設定されているに過ぎない。ケードゥブジェの体系においては、対象の在り方も知の種別もすべて、知に立ち登る形象に基づいて措定される。これは最も徹底した「顕現」一元論である。言い換えれば顕現対象が基本的な「対象」のすべてを尽くしているのである。以上から、ケードゥブジェの理論は、チャパが把握対象に還元した意味を、経量部・唯識を包含するような理論として再解釈したものと言えよう。

以上、顕現対象こそが把握対象である、と主張したチャパおよびそれを批判したサパンの説が、後のサキヤ派とゲークル派の論師によってどのように解釈されていったかを辿ってきた。更に思念対象や活動対象の問題は、特に「正しい認識手段」の設定の問題と繋がり、重要な内容を含んでいるので、別稿で改めて取り上げたい。

《略号》RT : Sa skya paṅḍita, *Rigs pa'i gter*, SKK, Vol.5 ; G : Go rams pa, *Tshad ma rigs pa'i gter gyi dka' ba'i gnas rnam par bshad pa*, SKK, Vol.12 ; S10 : Śākya mchog ldan, *Tshad ma rigs pa'i gter gyi dgongs rgyan*, 全集Vol. 10 ; S10 : do. *Tshad ma rigs pa'i gter gyi rnam par bshad pa*, 全集 Vol.19 ; TCB : do. *Tshad ma chos byung*, 全集 Vol.19 ; DGB : Tsong kha pa, *sDe bdun la 'jug pa'i sgo*, 全集 Vol. 4 ; RG : dGe 'dun grub, *Rigs rgyan*, 全集 Vol.4 ; YMS : mKhas grub rje, *Yid kyi mun sel*, Vol. Tha ; YDB : Yongs 'dzin rdo rje 'chang, *Yongs 'dzin blo rigs*, Old Se ra edition.

- 1) 本稿は拙稿「チャパ・チューキーセンゲとサキヤ・パンディタにおける対象設定の理論」(掲載紙未定)の直接の続編であり、同論文の議論を前提としている。2) S 10.5.4. 前掲拙稿参照。3) RT, 168, 3.6-4.1; 168.4.2. 前掲拙稿参照。4) G, 5. 2.1; S 19, 462.3-4. 5) G, 8.1.4-5. 6) TCB, 33.6. 7) RT, 168.3.4. 8) DJG, 498.4-5; YMS, 55a3; RG, 432.3-4; YDB, 3b4-5. 9) S 10.7.6-7. 10) チャパ説において顕現対象として認められる三者、個別的存在者・対象の普遍・非存在に顕現の意味については、筆者が参加して1989年3月東洋文庫より刊行予定の『リクテル』テキスト・訳・註、あるいは注1に挙げた拙稿を参照されたい。11) DJG, 498.5. 12) RG, 432.3-4; “chos de'i snang yul gyi mtshan nyid / chos des snang tsam gyi sgo nas rig par bya ba”. 13) DGB, 498.5; G, 7.4.6-8.1.1. 14) RG, 433.2-3. 15) 「意識と存在の問題事象への試論」『西藏学会報』31号(1985); 「ケードゥブジェの『プラマーナ・ヴァールティカ』注釈における自己認識と他者認識について」同34号(1988); 「経量部と唯識思想における対象認識の構造について」(掲載紙未定)参照。16) YMS, 55a3-4. 17) YMS, 55a4-5. 18) YMS, 55b5-6. <キーワード>把握対象, 顕現対象, サキヤ・パンディタ, チャパ・チューキーセンゲ(東洋文庫専任研究員)(昭和63年度, 文部省科学研究費奨励研究(A)による研究成果の一部)